
等身大ストリート

元jack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

等身大ストリート

【NZコード】

NZ8117C

【作者名】

元jack

【あらすじ】

あらすじ? んなもん説明すんのかつたりいから、とつとと読みやがれこのくそやう。

前編だくそつたれ

葉月。盆休みも最終日となつた或る蒸し暑い午前十時。玉碎市駅前商店街。居並ぶ開店前のシナ料理店、仏具屋、理髪店、餅屋、金魚鉢屋・・・他。アーケードの透明の天蓋からは早くも白銀色に煌めく招かれざる陽光、降り注いで。

なにせ愚痴めいた話から始めるようで申し訳ないのだが、この度の家人の実家への帰省も誠にもつてストレスフル、いつものことながら心労と汚辱とに塗れ、この上なく意識の底辺を白濁させるものであつた。

どうしてか？

なにも帰省、或いはヒターンラッシュの渋滞に疲弊したからではない。

家人と母との仲が異様に悪いからだ。

断つておくが、家人と姑ではなく、家人と、その実母との仲である。これがまあ犬猿の仲というか、はつきりいつてむんぬすごく悪い。悪すぎる。

私が見る限りの事、家人とその母、二人とも、それぞれ一個人としては全く偏った類の人間ではない。母はどこにでもいる初老の上品な夫人であり、家人は三つになる娘を連れた三十代前半の「ぐくぐく」平凡な主婦。博打に手を染めていくとか、酒に溺れているとか、ヘロインに依存しているとか、万引き癖があるとか、色々なものがくつきりと鮮明に見える成人向けビデオに出演したことが有る

だと、そういつた世間一般に有りがちな屈託とは全くのところ縁遠い二人である。にも関わらず、この二人がかちあうや、互いの何がそんなに憎いのか？ほんの些細なきっかけでもって突然的に口論が始まり、茶碗が飛び交い、取つ組み合つ。

そうなると家人の父、つまり家人の母の夫、つまり私の義母の夫、つまり私の義父などは勝手知つたるもので、「煙草が切れたので買つてくる」なんて云つて実際に上手に用事を作つては家から脱走してしまう。となると取り残された私は腐つても親類。それを無視しているわけにもいかず、さりとて義父を追つて逃げるわけにもいかず、そうしてやむなくその仲裁に入る、といった按配なのだが、大体からして母娘の因縁めいた争いに血縁上は他人の、ましてや男が割つて入るということ自体に相当な無理があるわけで、「お義母さん、まあまあ落ち着いて落ち着いて」「これ瑠璃江や、それはお義母さんに対してもう一度言つものだらう。いやいや、お義母さんの肩を持つだとか、そういうことではなくてだね」「あわわわわ！お義母さん、刃物はまずいすよ刃物は！」などと私はひとり右往左往するも、右往左往してみたところで争いは一向に止まないどころか更にエスカレート。そして怒りの矛先はどうとう私に向けられるに至り、そもそも貴様の稼ぎが少ないからこんな事になるのだ、この窓際族、宿六、などと理不尽極まりない罵声が容赦なく浴びせられ、しまいに義母は薙刀、家人は刺身包丁などを各自持ち出してきて私を市中追い掛け回す、と、一事が万事こんな具合であつて、私は一人、心身共に無用極まりない疲労困憊の極致へと毎度追い込まれるのである。なんでやねん。

とまれ、そういう事情から今朝は昨日までの三日間の帰省にて擦り減った自分自身を慰め、そして明日から再び始まる勤労の日々に向けて鋭気を養うべく、ならば早速、上等のスコッチウイスキーでも買ってきて大いに呑みましょと私はぶらり商店街くだりへ

と赴いた由であった。尚、この案には家人も大賛成である。酒でも喰らい、あの忌ま忌ましい実母の事などさつと忘れてしまいたいなどと酷い事を言つ。そんな家人を見るに、それほどまでに憎いのならばわざわざ帰省なんてしなければよいのではないか?と私は内心で思うのだつたが、これがまた不可解な事に正月、ゴールデンウイーク、盆など連休が近づいてくるにつけ、いつも彼女は喜々として帰省を立案計画、その日を待ち遠しくしているのだから女という生き物はつくづく解らない。

「ん?」

さて、商店街のアーケードはやや騒然。いつもの静かな休日の朝とは一味も二味も異なつた様子を見せていた。

見ると大小様々なステージがアーケード内のあるところに点在し、それらをお揃いの黒いティーシャツを纏つた多数の苦力風の男達が解体、それに伴つて発生するベニヤ板やら鉄パイプやらコンクリート片やら、といった廃材を次々と運搬、あらぬ方面へと運び去つている。しかるに、それら作業の殆どは手仕事であり、ステージを解体するそれに於いてすら、工具らしい工具は殆ど使用されていないようだ、なにしろベニヤ板などをベリベリベリと素手でもつて引つべきしなどしているのだ。無論、廃材の運搬も手運びであつて効率の悪いこと夥しい。

しかしながら、そういうた効率の悪さ以上に私の目を惹いたのは彼ら苦力の出で立ちである。

彼らがその上半身に黒いティーシャツを着用していたのは先に申し上げた通り。そんな事はどうでもいい。じゃあ何が目を惹くのかつて?それは二点あって、まずは一点、その下半身である。というの

も、彼らの下半身は皆一様に一糸纏わぬあられもない姿であつて、玉袋なんかをぶらぶらさせ、さすがは肉体労働者、ティーシャツの裾が隠しきれない浅黒い尻の下半分などは実に逞しくてふりふりとしているのだ。

もう一点は彼らの頭である。

脳味噌が、剥き出し。

と思ひきや、よくよく目を凝らして見てみると、それはめっちゃくちゃにリアルな脳の絵が描かれた帽子であった。一体誰がなんのためにこんな帽子を作ったのか？なんのために彼らはそんな帽子を被つているのか？大脳部分に描かれた皺の一本一本といい、脳全体が頭蓋の中で髄液に浮かんできやぱちゃぱとたゆたつているような描写といい、やや赤みがかつた乳白色の髄液の濁り具合といい、その絵柄は精緻に過ぎ、それが本物の脳でないこと、頭蓋と頭髪がそつくりそのまま「がぱつ」と取り扱われ、その代わりに透明のプラスチックなどのカバーが被せられているのでは決してないということは、それなりの注意をして観察しないと分からぬ程である。そこで通りざま、彼ら一人一人の脳みそを横目にさりげなく観察してみると、彼らの脳模様は完全には統一されていないようで、右脳が不細工に膨れ上がつたものもあれば、大脳自体がまるで萎んでいるかのように小さくなっているものもあつた。色彩も正に文字通り十人十色で、薄茶色のもの、妙に黒っぽいもの、妙に白っぽいもの、赤っぽいもの、紫色、緑色、金色、銀色、七色混合……とにかく枚挙に暇がない。おお、灰色の脳味噌の奴もいる。ということは、あいつは名探偵ボアロだ。ほほほほほ。面白。

そんな色とりどりの脳味噌に気を取られているうち、私はいつしかアーケードを抜けた。

目指す酒屋「硫黄」はアーケードから出たすぐのところを横に走る片側一車線の大通りを渡った向かい側に在る。因みに、この大通りを渡らずに右へ行けば駅だ。

店の暖簾をくぐると、六畳間ほどの狭い店内には硫黄のような臭気が立ち込めていた。売り物でもないのに店のどこかで温泉卵を茹でているとの専らの噂。そして店奥のレジのところにはヒッピーのようなサイケデリックな衣装の婆あが座ってる。そこで私は早速ながら店に入つてすぐ右隣の埃がかつたウィスキー棚へ手を伸ばし、まあ無難なところで七百一十ミリリットル入り千二百円のバランタインを確保する。しかし、これを瑠璃江は飲まない。どういうわけだか瑠璃江は安物の甲類焼酎しか飲まないのだ。それも安ければ安いほど良いらしく、以前、五リットルペットボトル入り千円などという如何にも怪しげな焼酎を自らどこからか仕入れて来、それを一人で一晩で空けてしまった事もある。どんな女だ。それへ試しに私も少し口を付けてみたのだが、目玉の飛び出るような臭さで途端に気分が悪くなつてしまい、それ以上飲む気にはとてもならなかつたのを覚えている。とまれ、そんな事情もあって私は適当に安く不味そうな焼酎を次に探す事とした。

「やれやれ、あんたも等身大かぶれかい？」
「は？」

探している最中、婆あが声を掛けてきた。

「昨日まで祭りだったからねえ。毎年、この祭りが終わつた後は、みんな等身大だとかなんだとケチな買い物しかしなくなる。昔はこんなことなかつたのに……困つたもんだよ。全く」「あ、そうか。昨日まで祭りだったんですね」

全く、せつかく人が買い物に来てやっているといふのに安い酒を探してゐるからつて「ケチな買い物」とは随分な言い草だと思ったが、そうだ、昨日までの三日間、私たち家族が帰省している三日間、玉碎市内では例の「等身大ストリート」が開催されていたのだ。

等身大ストリートとは例年、よりによつてお盆休みのど真ん中に市が総力を挙げて大々的に催す祭りのようなものであつて、この間、市の主要道路はことごとく交通規制。そして歩行者天国となつたストリートのあちこちには仮設ステージ、露店商、催し小屋などが組み上げられ、近県そこかしこより訪れる見物客はのべ一千万人。市内は一時的にとんでもない混雑を見せるのである。

しかし、私は敢えてはつきりと言わせて頂く。

ちつとも面白くない。

一体全体、なにがそんなに面白くて毎年毎年これほど多くの見物客が飽きもせずにやつてくるのか?私にしてみればいさか理解に苦しむところなのだが、何しろこの祭り、「等身大」などとわざわざそのタイトルに標榜されている通り、「肩肘張らず、日常のありのままの等身大の自分をさらけ出そう」とでもいうようなコンセプトを持つついて、その基本的姿勢たるや、ありとあらゆる祭りの出し物に於いて徹頭徹尾、貫かれていたのだ。

例を挙げるならば、先刻苦力達がアーケード内で解体にあたつていたステージである。これらのステージ上では恐らく昨日までバンド演奏、演劇、ポエトリーリーディング等等の各種表現活動が活発に展開されていたものと田されるが、以前に私が観たその内容ときたら、例えば「平社員、増岡辰一郎の通勤風景」などと銘打たれた芝

居では、朝七時半、三十五年ローンで昨年購入したばかりの3LDK七十平米のマンションを出た増岡辰一郎が駅までのおよそ十分間の徒歩を経て駅の売店で経済新聞を購入、快速電車に乗り、地下鉄に乗り換え、再び歩いて雑居ビルの七階の事務所に出勤する、といった余りに日常的に過ぎる一部始終が何のドラマ性もヒネリもなく、ただ延々と平坦に演じられた。

バンドの演奏なんかも凄い。この祭りのステージに登場するバンド連中ときたら殆ど高校生ぐらいいの年端もいかぬ若者達ばかりであつたのだが、ところが、その荒削りな演奏に乗せて歌われる内容たるや例えば「上見て暮らすな。下見て暮らそう。幸せはあるの足元に転がっている」という何とも夢のない、味気のない、ある意味で達観したとも取れるメッセージソング、はたまた「地方公務員の採用試験に今年は落第してしまったが、さりとて不況の折、民間企業への就職なども中々おぼつかない今の世であつて、なので一年間は就職浪人をし、来年もう一度公務員試験を受けてみて、それで駄目なら叔父のコネでどこか適当な働き口を見つけて貰おうと思つてゐる」などと一体誰がそんな話を聞きたいと思うのか？首を傾げずにはいられないような、若いくせにそんなしみつたれた歌ばかりなのである。

更に市役所の1F憩いのコーナーでは写真展なども催された。賢明な読者諸君にはもう既にお察しがついているものと思われるが、その通り、そこに展示された市民有志の写真の被写体なんつたら、はは、行きつけの飲み屋の出し巻きとか、コンビニでエロ雑誌を立ち読みするおっさんとか、マンホールの蓋だとか、缶コーヒーだとか、鉄パイプだとか、とにかく下らない。非日常性、芸術性といふものがそこからは徹底的に排除され尽くしていたのだ。

考えてもみて欲しい。

平凡な日常、ありのままの日常、等身大の自分。それらは確かに素晴らしい。大切だと思う。

だが、そもそも祭りというのは、そういうた日を敢えて一時的に忘れ、山車を牽いたり、神輿を担いだり、別に美味しいもないたこ焼きとか焼きそばとかを屋台で買って食つたり、風船ヨーヨーをぶら下げる、金魚を掬つたり、踊つたり、歌つたり、といったある種の「非日常性」につかの間の身を委ねる事、そんなところに醍醐味があるのでなかつたか？しかるに、そういうた非日常性を徹底的に排除するどころか、あまつさえ日常にも増して日常を、スポーツ新聞のような日常をワザワザこれ見よがしに見せつけるような祭りに足を運んで一体何が面白いというのか？

「確かにねえ。あんな祭りの何が面白いんでしょう、僕なんか玉砕市に越してきてから六年になりますけど、最初の年に一回だけ観て、あんまり馬鹿馬鹿しかつたもんだから、それからは一度も観てないですよ」

依然として焼酎を選びつつ婆の方へは顔を向けず答えた。返事がない。愛想のない薑婆あだ、と、婆あを見やる。すると小柄な彼女はとても悲しそうな表情のまま俯き瞑目し、微動だにしないでいた。仕方ないので五分ほど待つ。動かない。まるで生気が感ぜられぬ。或いは、死んでるのかも知れなかつた。右肘のごく軽い切り傷が包帯の中でしきしきと痛む。昨日、義母から薙刀でもつて切り付けられた傷。立ち込める硫黄の臭。

私は代金をレジの横に置いて「硫黄」店外へと。相変わらずの強烈な日差し。さて、あとは再びアーケードを戻り、社宅へ立ち帰つて昼酒ならぬ朝酒を呷るばかりであつた。のだが、さて、この時、つ

いでだから駅前のメイン会場へ寄つてみよう、などといふ気まぐれを何故か起こしてしまった私は後から思い返すに本当に馬鹿である。馬鹿馬鹿馬鹿。わしの馬鹿。そこに数多の不運、そして数奇な運命が待ち受けていようなどとは無論、夢にも思わぬまま。

たどり着いたメイン会場特設ステージの前はアーケードの中にも増して騒然としていた。なにしろ、このステージときたら馬鹿デカい。先程見てきたミニステージなど比べ物にもならず、まるで高原などで行われるロックフェスのそれの如く巨大かつ立派で、等身大祭り如きに使われるのはつくづくもつたいないと思う。当然、それを解体せんとする苦力の数も優に百人を超え、人いきれにムツとくる。それにしても彼らの出で立ちはつくづく等身大ではないなあ、と私は果然と眼前の光景を見やるのであった。

等身大でないといえば、彼らの雇用環境も現代日本に照らし合わせてみれば決して等身大ではないようだ。そもそも冒頭より私が彼らを敢えて「苦力」などと前時代的な呼称で呼んでいたのには理由がある。なにしろ彼らの労働工具といったら傍目にも過酷そのものであって、下半身剥き出し、玉袋ぶらぶら、工具を使わない素手作業、といった諸条件もさることながら、彼らの表情には一様に深い疲労の色が浮かび、恐らくその様子では昨夕から一睡もせずに斯かる苦役に従事させていたのであろう。更に、このメインステージの解体現場に至つては、馬に乗った男が数人巡回し、些かへたばり気味の苦力を手にした角材のようなもので容赦なくひっぱたいていたのだ。これではいくら頑丈な肉体労働者とてたまつたものではない。あまりに非日常的、前近代的な現場模様。等身大のしわ寄せがこんなところに来ているのだろうか？今年の標語なのか？ステージの上手では「揉み出そう！等身大の私！」などと大書された垂れ幕、今にも降ろされようとしていて。

そんな現場をぼんやりと眺める私。バランタインと焼酎の入ったビニールをぶら下げ眺める私。そこへ、やがて馬に乗った男が居高々に一人、近づいてきた。

「貴様は玉碎市民か？」

全身黒ずくめに黒いヘルメット、黒いサングラス、そして長さ二メートル程の角材を右肩に担いだ馬上男は私を見下ろし、高圧的な物言いでもって私に尋ねた。

玉碎市民かと問われれば、そうだ、としか答えようがない。

しかるに、そのような通常なされるべき受け答えの成立を容易ならしむ事情というものはこの場合、確かに在ったわけで、それは何かと申し上げれば、早い話が私はこの場を偶然通りがかつた一通行人に過ぎぬ訳であつて、こんな見ず知らずの男にいきなり馬の上から貴様呼ばわりされる筋合いなどこれっぽっちもない、こんな訳の分からぬ男の尋問に答える義務などは全くない、といった事情である。偉そうに。腹立つ。ばかにすんじゃないわよ。なので私は男を相手にする姿勢など露とも見せず、毅然と踵を返した。返そうとしたのだった。が、それは叶わなかつたというのは次の転瞬、私がその場に敢え無く転倒、悶絶昏倒したからだ。というのも男の所持せし角材がすん、と私の後頭部をしたたかに一閃したからだ。

……一体、どれだけの間意識を失っていたのだろうか？目を覚ますと陽は真上。正午ぐらいか？殴られた後頭部はいまだ殴られ続けているかのようにガンガンと痛む。その痛みの激しさ故、なかなか平靜をとりもどせない自分がいて、クモ膜下出血とはこんな感覚なんだろうか？くそつたれ。なんだつてこんな目に。

次に、私は自分の出で立ちに最悪の変化が訪れている事を知った。

なんといつことか、私の出で立ちは先に申し上げた苦力ファッショ
ン、つまり例の黒いティーシャツに下半身は素っ裸、といった装い
に様変わりしてしまっていたのだ。いやんいやん。そして自分では
見えないが、恐らく頭にはリアルな脳味噌帽子が被せられているの
だろう。

私は慌てて周囲を見回す。ついぞ先刻まで着用していた自分の服は
何者かが持ち去ってしまったようで、どこにも見当たらない。当然
の如くバランタインも焼酎も。そして今や私も同様の風体となつた
苦力達は相も変わらず忙しく立ち働いている。そういえば私を殴つ
た馬上男はどこに行つたのか？

いた。

遙か百メートルほど向こうのステージの下で、相も変わらず苦力を
ひっぱたいている。こちらには注意を向けていないようだつた。

となれば、早くここから逃げねばならぬ。

私は激痛が走る頭を押さえ、よろよろと立ち上がりつた。そして出
来るだけの冷静さ、何気なさを装い、そろそろと歩き出した。下手
に騒いだり走つたりすれば即座に馬上男に感づかれると思われたか
らである。心臓が脈打つことに、頭の中ではまるで鐘が鳴り響くよ

う。

解体現場からは拍子抜けするほどに難なく脱出することができた。
私は行きし通つてきたアーケードには戻らず、それと平行に走る片
側一車線の裏通りを社宅に向けて歩いた。なんとなれば、それが駅
から社宅までの最短コースだったから。

それでも、なんたら情けない恰好であるとか。つい先刻まで剥き出しになつた下半身にぶら下がる私の陰茎はすっかり萎みきつて一センチ程の長さしかない。肉体労働を普段の生業としていない私の尻肉は他の苦力達とは違つてダラダラと伸びきつている。そして偶然通り掛かつた蕎麦屋のガラス戸に映つた私の帽子の脳味噌ときたら、なんと右脳しかないのである。左脳がじつつりと欠落。左脳部分は空洞。すっからかん。もしかしたら、私の本当の脳みそもこうなつているのかも知れぬ。しかし、その帽子を脱ぐことは出来なかつた。瞬間接着剤でびつたりとくつつけられているのか？帽子をどううとしたらベリベリと髪の毛が一緒にくつついて引き張られ、痛いつたらありやしないのだ。これでは当分脱ぐことは出来ない。まったく、なんといふことをしてくれるのか。

現場を離れて尚、私は努めて平静を装つた。早く帰りたい一心から走つたりは決してせず、もじもじと自らの下半身を隠したりもせぬように心がけた。裏通りとはいえ、往来には一般の通行人がちらほらと散見され、一方、今、私が行つている行為は立派な猥褻物陳列なのである。悪びれたら終わりだと私は直感していた。

ところが事態は最悪の方向へと展開しつつあつた。

通りの反対側に佇立していた官憲と思しき長身の男が私の姿を認めるや、やおら、悠々と通りを渡つて向かつてきるのである。私の方を見ていた二タ一タ笑つてゐる。弱者を翻るのが愉しくて愉しくて仕様がない、とも言いたげな細いいやらしい目。腹がぼこりと前へ突き出でている割には妙に「すらつ」と長い脚をして、口髭を生やし、チューインガムをくつちゃくちゃと噛みつつ右手に握つた警棒を左手の平にぱっしんぱっしんいわせている様子。まるでC級アメ

リカ映画に出でぐる悪徳警官だ。

まずいことになった。よりによつて、こんな奴に出くわすとは。しかしに、ここで逃げ出したり立ち止まつたり、はたまた慌てて下半身を隠匿隠蔽したりすれば自分の後ろめたさを自ら認めてしまうようなもので、そういえば硫黄の婆あも置き去りにしてしまつた。婆あに何をしたというわけでもないが、後ろめたいといえばそれも何とはなしに後ろめたい。そこで私、引き続き外面上の平静さを崩さず、それでいて、それとは気付かれないよう細心の注意を払いながらもスピードを若干上げ、なおも歩を進める事としたのだつたが、しかし奴はついてきた。あえて振り返らずとも音で分かる。私は間近に、すぐ背後に聞いたのだ。奴のブーツがじやりじやりと砂を踏む音を。くちゅくちゅとガムを噛む音を。警棒のぱしばしを。まるで薄氷の上を歩くような感覚。刃の上を歩くような感覚。眉間に中央がストレスできりりと痛むのを感じる。それにも増して後頭部には依然としてぼこぼこと殴打され続いているような激痛。

そうして百メートル程歩いたるうか？永遠に続くかと思われるような長い長い道のり。もしかして本当に永遠なのではないか？と気がしない。しかし、やがて眼前には築三十五年、五階建ての古ぼけた煤けた社宅が次第に姿を顯し始めたのである。その社宅の手前、片側二車線の国道が横切つていて。高速道路へと続く主要幹線道路だけに車の往来、極めて多く。この国道を渡れば我が家は目と鼻の先だ。

「あつ。課長！」

その時、私は国道を渡る横断歩道の手前、信号待ちをしている一人の見慣れたジャバザハットみてえな体躯の中年の姿を見た。外ならぬ私の直属の上司にして、同じ社宅の住人、屁割賦金策課長だ。全

くと言つていよいよ似合つておらぬ派手な橙色のアロハシャツと馬鹿のようにだぼつとしたベージュの短パンとを間抜けに身につけた彼は、その間抜けた服装と同じく間抜けな腑抜けた呆けた表情でもつてぼんやりと信号の下、突つ立つていた。四十代半ばにして、すでに額は後頭部まで後退している。右脇に抱えられた巨大な信楽焼きの狸。

なにしろ小心者、無能を絵に描いたような課長であった。このようないい男が管理職に抜擢されたという事実、そのこと自体、我社の人事部の白痴さ加減を如実に示す致命的な人選ミスであると言え、その人事は周囲のみならず、本人自身にとつてもこの上ない不幸であつたろうと思われる。自らの才覚でもつて部下を動かす事、一向にままたらず、そのくせ上からの評価ばかりを気にしては点数稼ぎばかりに腐心する憐れな男であつた。部下の手柄はあたかも自分の手柄であるかのように部長あるいは次長に報告し、部下の小さな失敗は部下の大きな失敗として報告するような男であつた。しかし、彼の上長達とて馬鹿ではない。そんな屁割賦の姑息をなどとうの昔にお見通しあつて、よつて、屁割賦が策を弄すれば弄するほど、彼は自らの評価を落とし、行く先々の部署からことじとく放逐され、そうしてとうとう半年前、私の所属部署、すなわち別名ダメ社員廃棄場とも呼ばれ、後ろ指を指されるところの鼠害対策部へと回されたのである。平たい話が自社のオフィスに出る鼠を駆除する部門だ。笑わせるじゃないか。むろん衛生が行き届いた近代的オフィスの事、鼠が出ることなんて殆ど無い。

とはいへ、何と云つても今は追われている、私は官憲に、あらぬ疑いを掛けられ。そこへきて目前の横断歩道は赤信号。アバンギャルドなファッション。つまり、もはや今の私は逃げも隠れも出来ぬ局面にまで追い込まれているのであって、追及を受ければ自分一人だけの弁解では潔白を証明すること実に困難であると予想され、要

するに、かかる緊急事態に至つてはもうなんとか後先などに構つておれぬ。よし、ならば屁割賦に有りのままを告げ、そつして屁つて貰うことじよ。私は加害者ではなく、被害者であるという事、見も知らぬ馬上男から突然の暴力を受け、身ぐるみ剥がれ、このような恰好にされた事、そして、私は反社会分子などでは決してなく、寧ろ会社などでは全くもつて眞面目な社員、鼠駆除員であるところの眞実を、必要とあらば官憲に対して釈明せらるのだ。おおー！ おおー！ いくら無能極まりない薄ら小便ハゲ野郎の屁割賦とて、そのぐらこの事なら出来るだろ？

「おおーい！ かちょー！ へかつぶかちょーおー！」

うわすつた声。我ながらおかしな声だと思つ。そして、とうとう私は走り出した。これで助かつたと思つた。自然と笑みがこぼれるのを禁じ得ない。むは。むはは。むははは。ところが、

「 めめあーああー！」

どこのまでも運命は苛烈である。屁割賦のばけときたら駆け寄つてくる部下の姿を認めるなり、恐怖に目をひん剥き、狸を放り投げ、なんとまあ、脱兎のじとく逃げ出しあがつたのだ。地面に落ちて粉々に割れる狸。

「 ちよーちよーとーあの、か、かちよおー！」

「 めめあーばけものー！」

ばけもの。私は気づいた。はつとむせられた。確かに今の私の姿ときたら最悪だ。下半身は剥き出し。一見すれば脳味噌だつて剥き出し。更に先ほど馬上男より殴りつけられた傷口が開いたのだろうか？ こつの間にか頭部からは夥しい量の出血すらも見られるようだつ

た。つまり、丸裸の脳味噌から大量の血を流しつつ、下半身を露にした変態がむははと満面の喜悦をたたえて頓狂な声を上げ、駆け寄つてくるのである。これでは化け物などと恐れ、逃げられても仕方がない。とまれ少なくとも言えたのは、私が誰であるか？彼は全くのところ気が付いてなんかいないし、私が誰であっても今の彼はそれどころではない、そのぐらいパニックに陥っている、という事実であった。が、ますい。課長の、屁割賦の逃げた先は！

「ああっー！」

そのようにして、事態はますます約束されたかのように最悪の展開を見せたのである。

憐れな屁割賦は、この私を化け物と認めるや、赤信号にも関わらず横断歩道を駆けた。錯乱し、国道を直角に、一直線に突つ切つて逃げた。そして、そして、道を二分の一ほど渡つたところで、彼の弛みきつた肥満体は華麗な曲線を描いて空中に高らかと舞つたのだ！

私がとらわれた感情を言い表すならば絶望だろうか？この光景を見、私の全身からは力という力が抜けてしまった。国道の十五メートル手前で、力が抜けた私はその場にへたりこんで、へなへなど。

「あみゅうー！」

何故か「ざやっー」とか「あがっー」ではなく、このとき咄嗟に口から出た悲鳴はあみゅう、である。左肩をぽんぽんと叩いて振り向かせた私のこめかみを、官憲の警棒はしたたかに、何の前置きもなしに、容赦なく一撃したのだった。その余りの衝撃に目の玉が飛び出た。私の右脳しかない脳は頭中で跳ね回るかのようであった。私

の体は九十度の捻り回転を加え、その場にビュウ、と倒れ込んだ。視界はあるで床体操の前転でもしているかのようにぐるぐると田んぼぐるしく、地面と空とが交錯した。それもそのはず、私の飛び出した目玉はいきなり地面を転がったのである。

「ぐおーらー！おまはんーなにを勝手にとほけて逃げさらしてけつかりはつまんねんのんな！國家権力をなめとつたらあきまへんえー！おら！どないや！なんとかゆうてみて欲しいわ！おらつー！」

「あひいーー！田つ、田えええ！田えだけ戻させてえええ！」

官憲の打擲は倒れた無抵抗の私に対し、尙も執拗であった。しかし私はそれを避けるどころではない。今まさに、私の目ん玉は自らの預かり知らぬところにある。目ん玉がないという状態が、まさかこれほどまでに恐怖を呼び覚ますものであったとは。

私はアスファルトの上を這いつぶぱり、陰惨極まりない官憲の仕打ちに堪えながらもようつよつと田ん玉を捲し当てた。そして、やつとの思いでそれを自分の顔面の本来あるべきところに戻したところで、先刻の馬上男がいつの間にやら官憲の傍らへとやつて来、一人揃つてこの私をニヤニヤと見下ろしている現状を知ったのだ。

「くつ。いつもすまねえな。ギャビー」

「ええつちゅうこつちゅ。ナミーはん。わてとおままんの仲やおまへんか。それにしてもこやつ、ふざけたおっさんやで。わてが追いかけたらやな、あんた、しらつとして逃げまんねんで」

「はつはつはつ。そりゃあ、おめえの顔が怖いからだわ」

「そない失敬なサミーはんよ。こりつーこの困ったちゃん！言われてもたやんけ。どないしてくれまんねん。わての顔が怖いか？怖ないやう？おおつ？どないやねん？なんぼのもんやねん」

官憲ギャビーはまたしても私を小突き回す。どうやら今の状況を百パーセント楽しんでいるようだ。小突かれるまま、あっちへこっちへこりころ横転する満身創痍の私。なんと惨めなことだろ？ 私がいつたい何をしたというのか。

「よし。じゃあ持ち場に戻るとするか。ああそりそり、ギャビーよ。そこ側道で血い流して倒れてるおっさんがいるがよ、ありや一体なんだ？ そのまま放つておいたら死んじまうんじゃねえか？」

「さあ、知りまへん。まあえのんちやう？ あんなんに関わり合つたらあんた、また話がややこしなりまつせ。ほんなん、それこそ警察か医者の仕事とちやいまつか？」

「くつくつくつ。そりやそうだな」

「そや。君子危うきに近寄らひず」

以上のような経過を以つて馬上男サミーに捕えられ、奴の携行せし荒縄によつて胴体手足をぐるぐる巻きにされ、そうしてずるずると先刻の会場跡へ力なく引きずり戻される私。さて、その後、私が強制的に従事せられた労働とはこつだ。大ステージ会場跡にはいつの間にか解体用建機が一台、鎮座ましまして、その建機がどーん、どーんと金玉のようにぶら下げる鉄球をステージに打ちつける解体作業によつて発生させるコンクリート、ブロック片等の廃材は一片あたりおよそ二十一三十キログラム超。その巨大な塊を、私はただひたすら単純に、愚鈍に、街はずれの山をくり抜いた碎石場まで担いで運んだのである。素足で。徒步で。片道約二十キロメートルの道程。その途上に於いて少しでも休んだり、手を緩めたり、へたばつたりする素振を見せようものならば即座にサミーから殴られた。小突かれた。なにしろ先の脱走の一件があつて、なので、今や奴ときたら私から一瞬たりとも目を離さうとしない。

容赦なく照りつける真夏の灼光。コンクリート片が食い込む肩。そ

の皮膚は荷役との摩擦に脆く破れ、ずるずるに剥けに剥け、白い脂肪が体液と脂とを伴つて露。陽光にじりじりといたぶられ、焼肉のように焼かれている。遂には靴を履いていない足の裏の皮をも剥け、裂け、剥き出しどとなつた赤・青・黄の神経組織は地面に直になすりつけられて、その砂利の一粒一粒はその神経を、私の痛覚を絶望的に苛んだのだった。その痛さとくれば現実、飛び上がるほどに痛い。笑っちゃうぐらい痛い。そこへ疲労と脱水とが加わって道中、私は幾度となく路傍に倒れ込んだのである。すると途端に飛んでくるサミーの角材。だが、殴られたつて突かれたつて倒れるものは倒れる。その間隔はあるみる短くなり、遂には一時間半後、私は起き上がるどころか、とうとうピクリとも動けずにいた。無数の限界を超えた究極の限界。

「このつ、たにし野郎！起きやあがれこの！さぼつてんじゃねえ！まだ今日のノルマの半分もいつてねえじやねえか！」

体中のありとあらゆる感覚が麻痺。サミーの怒声、打擲すら次第に遠くなつて。震んだ視界の向こう、勘忍袋の緒がとうとう切れたか、いつの間にやら馬から降り、怒りの形相も露と隱さず角材を大上段に振りかぶった奴の姿がぼんやりに見えた。

「むつきやあああああ

あ、こりや殺される、と思つた。殺されるならそれも致し方ないが、それにしても類人猿みたいな甲高い声をサミーは立てるんだね、と、つくづく感心する。他人事のように。他人事なんだけどね。サル野郎め。あ、そうそう、せめて死ぬのなら、どうせならその前に一日でもいいから瑠璃江と娘にまみえたかったものだ。今頃二人はどうしているのだろう？私の帰りがあんまり遅いもんだから心配でもしててくれるのだろうか？可愛い三歳の娘は可哀相に、これから片

親だ。不憫な事だ。これからどうのような人生を歩んでゆくのだろうか？将来、結婚詐欺に遭つたりはしないだろうか？思えば出来の悪い父親だったが、それでも私とてやはり親。気がかりな事この上ない。会いたい。もう一度だけでも会いたいなあ。あ、意識が。耳鳴りが。いよいよもつて死ぬのか？今、どどめをされたのか？もう、何も感じなくなっている。

一年後。

結論から申し上げれば、私はうまくやっている。

あの日、サミーは角材を大上段に構えたが、彼がそれを振り下ろす直前、私は再び氣絶をしてしまったようで、結果的にはそれによつてどどめの一撃を免れたのである。

さて、次に気がついた時、私は薄暗い、じめっとしたやや広い室内にいた。目の前には大量の「TEAM Gジャン」の袖を裁断し、いわゆるノースリーブの形にすることなのだと。

「やつと気がついたか。ばかものめ」

振り返れば、そこにはサミー。こいつ、まだいやがつたのか。しつこい奴だ。果たして彼の説明によれば、ここは先程の会場跡とは駅を挟んで反対側に位置する青少年交流センターの一階。私のこれららの仕事は、これら山積する「TEAM Gジャン」の袖を裁断し、いわゆるノースリーブの形にすることなのだと。

「ほらよ、これ」

と、サミーはやや鏽びかかつた裁ちバサミを私に投げて寄越す。

この日から、私の裁断の日々が始まった。来る日も来る日も私はデニムを裁断し続けた。中国製なのか？全くのところノーブランドのデニムを。中にはGパンも紛れ歩いて、それは太腿の根本部分からズボンと裁断し、半ズボンにするのだった。ある時、そうして出来上がったノースリーブGジャンと半ズボンとを私はサニーの目を盗んで面白半分に試着。頭には相変わらずの脳味噌帽。予想通り、何とも恐ろしく格好悪い。こんな情けない格好を一体誰がするというのか？誰が着るために、私は延々とこんなものを生産し続けねばならぬのか？少なくとも等身大ストリートには何ら関係がないようと思われる。

ところが、断てども断てどもデニムは無限に尽きることがない。何しろデニムはフロアに溢れかえって埋め尽くされていて、しかも八階建ての建物内、全フロアが例外なく同様の有様であったのだ。だが私にとっては聊か嬉しい出来事もあった。裁断を始めてから一週間ほどは帰宅を一切許されなかつたものの、その後は帰宅できるようになつたのである。また、どういう風の吹き回しか？会社は首になるだらうと覚悟を決めていたが、意外にも会社は私をここへの出向扱いとした。新たに与えられた私の肩書きは玉碎等身大ストリート実行委員会デニム裁断部・裁断推進課長である。課長といつても課員は当然いない。私の上長には例のサミーがデニム裁断部長として納まつた。しかし奴の役目といえば、相も変わらず私を角材で小突き回し、業務上の過怠を未然に防ぐことぐらいである。

それでも私は思う。

今の仕事、生活こそ、これすなわち私にとって分相応の、等身大のそれではなかつたか？と。

嘗ての私は分相応では決してなかつた。きっとそうだ。競争の激し

い会社社会。等身大でないくせに、能力もないくせに、そこへ何の間違いか入つてしまつたばかりに私は鼠捕りにまで落ちぶれてしまった。鼠捕りもプロならいいが、私は中途半端だった。そうして私は知らずの内に自分自身を削り取り、疲弊させていたようだ。そうだ。私のような男は、こうしてせいぜい脳味噌を剥き出しに下半身をぶらぶらさせ、ひねもすデニムでも裁断し続けているのがお似合いなのだ。そこに私は気がついた。今や私は等身大。それが影響してか？どういうわけか瑠璃江と彼女の母との仲も今では割りと上手くいっているようである。

そして等身大ストリートの季節が再びやつてくる。つまり屁割賦の一週忌も。それでも私は相も変わらずここでデニムを裁断し続けているのだろう。ピース。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8117c/>

等身大ストリート

2010年12月20日01時56分発行